

女ことば・男ことばの研究

差異と変遷

黒 須 理 紗 子

1．はじめに

日本語には、女性が主に使用する女ことばと、男性が主に使用する男ことばがあり、日本語の男女差は、日本語を特徴づけるものの一つであった。しかし、近年、日本語の男女差は縮まり、ことばの中性化が進んできていると言われている。

そこで、本稿では、戦後から現在にかけての小説に見られる女ことばと男ことばを分析し、女ことばと男ことばの差異と変遷について考察する。

分析する項目は、性差が現れやすい人称詞と文末詞、それに感動詞とする。それぞれの年代の小説に登場する男女が使用する各品詞の種類やその使用頻度の差異を年代ごとに比較することで、当時の人々が男性的だと捉えたことば遣い・女性的だと捉えたことば遣いを分析する。また、その男女のことばの差異の表出の度合いについて男性作家の作品と女性作家の作品で比較を行い、それぞれが男性的だと捉えることば遣い・女性的だと捉えることば遣いも見ていく。

2．調査方法

2.1 調査対象

1946～2005年を10年ごとに6つのグループにわけ、『出版年鑑』のベストセラ―一覧等から各年代で日本文学を10作品(男性作家の作品と女性作家の作品を各5作品ずつ)ずつ選出する。選出された計60作品について、冒頭から男女各100発話(「」で囲われているものを1発話、句点や疑問符で区切られるものを1文とする)ずつを調査し、年代ごとに比較する。なお、調査の対象とする作品とその作中の発話には、以下の条件をつける。

作品： 日本人作家による作品 フィクション

場面は当時にとっての「現代」

男女が最低1人ずつ登場する 一人の作家につき1作品

発話： 幼児語や老人語を避け、中学生～60歳未満同士の会話を対象とする
 調査対象は標準語とし、方言の発話は除外する
 年齢による使用語彙に相違が生じるのを避けるため、描かれている
 場面から数年以上前の回想シーンの発話は除外する
 発話数が極端に少ない人物の発話は除外する

以上から選出された調査対象となる作品は以下のとおり。

	発行年	作品名	作者	文数 (女/男)	登場人物数 (女/男)
1946 ～55 女性 作家	1947	風知草	宮本百合子	852/710 文	10/13 人
	1948	迷路	野上弥生子		
	1951	安宅家の人々	吉屋信子		
	1953	浮雲	林芙美子		
	1955	朱を奪うもの	円地文子		
1946 ～55 男性 作家	1948	斜陽	太宰治	814/778 文	14/15 人
	1951	自由学校	獅子文六		
	1952	千羽鶴	川端康成		
	1953	君の名は	菊田一夫		
	1954	火の鳥	伊藤整		
1956 ～65 女性 作家	1956	うつむく女	平林たい子	781/806 文	10/17 人
	1957	挽歌	原田康子		
	1957	おとうと	幸田文		
	1964	感傷旅行	田辺聖子		
	1965	白い巨塔	山崎豊子		
1956 ～65 男性 作家	1956	太陽の季節	石原慎太郎	651/891 文	11/15 人
	1957	氷壁	井上靖		
	1958	点と線	松本清張		
	1964	されどわれらが日々	柴田翔		
	1964	砂の上の植物群	吉行淳之介		
1966 ～75 女性 作家	1966	氷点	三浦綾子	848/780 文	12/14 人
	1968	三匹の蟹	大庭みな子		
	1972	恍惚の人	有吉佐和子		
	1973	空の果てまで	高橋たか子		
	1974	虚構の家	曾野綾子		
1966 ～75 男性 作家	1967	万延元年のフットボール	大江健三郎	1028/1061 文	11/15 人
	1970	冬の旅	立原正秋		
	1971	香子/妻隠	古井由吉		
	1971	夏の闇	開高健		
	1974	アルキメデスは手を汚さない	小峰元		
1976 ～85 女性 作家	1978	海を感じる時	中沢けい	673/693 文	7/7 人
	1979	もう頬づえはつかない	見延典子		
	1979	比叡	瀬戸内晴海		
	1983	波うつ土地	富岡多恵子		
	1984	波光きらめく果て	高樹のぶ子		
1976 ～85 男性 作家	1976	限りなく透明に近いブルー	村上龍	835/825 文	15/14 人
	1977	戒厳令の夜	五木寛之		
	1978	九月の空	高橋三千綱		
	1981	なんとなく、クリスタル	田中康夫		
	1983	探偵物語	赤川次郎		

1986 ～95 女性 作家	1988	熟れてゆく夏	藤堂志津子	711/926 文	10/8 人
	1989	キッチン	吉本ばなな		
	1990	葉桜の日	鷺沢萌		
	1994	蛇鏡	坂東真砂子		
	1994	天使の卵	村山由佳		
1986 ～95 男性 作家	1986	新・坊っちゃん	ビートたけし	781/904 文	12/13 人
	1987	ノルウェイの森	村上春樹		
	1991	緋い記憶	高橋克彦		
	1993	女ざかり	丸谷才一		
	1993	深い河	遠藤周作		
1996 ～ 2005 女性 作家	1996	恋	小池真理子	749/891 文	10/12 人
	1999	柔らかな頬	桐野夏生		
	2001	模倣犯	宮部みゆき		
	2004	蹴りたい背中	綿矢りさ		
	2004	蛇にピアス	金原ひとみ		
1996 ～ 2005 男性 作家	1997	失楽園	渡辺淳一	638/688 文	9/8 人
	1997	樹下の想い	藤田宜永		
	1999	永遠の仔	天童荒太		
	2003	世界の中心で、愛をさけぶ	片山恭一		
	2004	いま、会いにゆきます	市川拓司		

2.2 調査項目

データ中に現れた人称詞・文末詞・感動詞を以下の観点から分析する。ただしについては、文末詞や感動詞ではあまり結果に影響が無かったので、人称詞でのみ分析の観点に加えた。

話し手の性別 女性 / 男性

話し手の年齢 若い (40 歳未満) / 年配 (40 歳以上)

聞き手の年齢 年上 (聞き手が話し手よりも年上) / 年上以外 (聞き手が話し手と同年齢、もしくは、話し手よりも年下)

話し手と聞き手の性別 同性 / 異性

話し手と聞き手の関係 姉妹 / 弟妹 / 夫婦 / 親 / 子 / 親類 / 恋人 / 友人 / 知人 / 先生 / 生徒 / 上司・先輩 / 部下・後輩 / 同僚・級友 / 初対面

書き手の性別 女性作家 / 男性作家

3 . 女ことばと男ことばの差異

3.1 人称詞

本調査で得られた結果より、各人称詞の使用比率を男女で比較すると、自称詞は図 1 に、対称詞は図 2 のようになる。なお、図中の括弧内の数値は各人称詞の

出現回数を示している。以下の図においても同様とする。

図1 自称詞の男女使用比率（女性1305例／男性1222例）

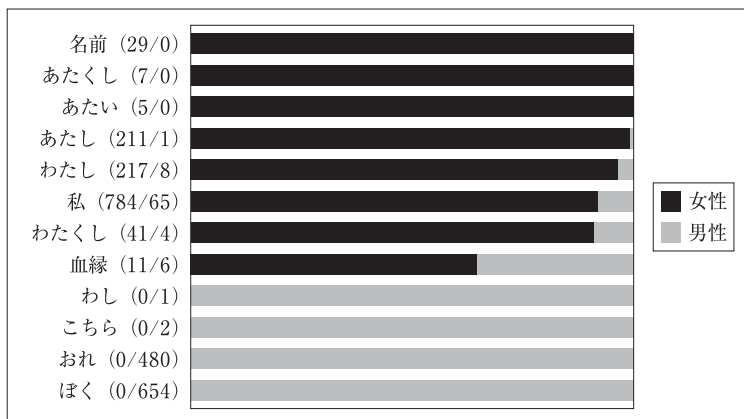
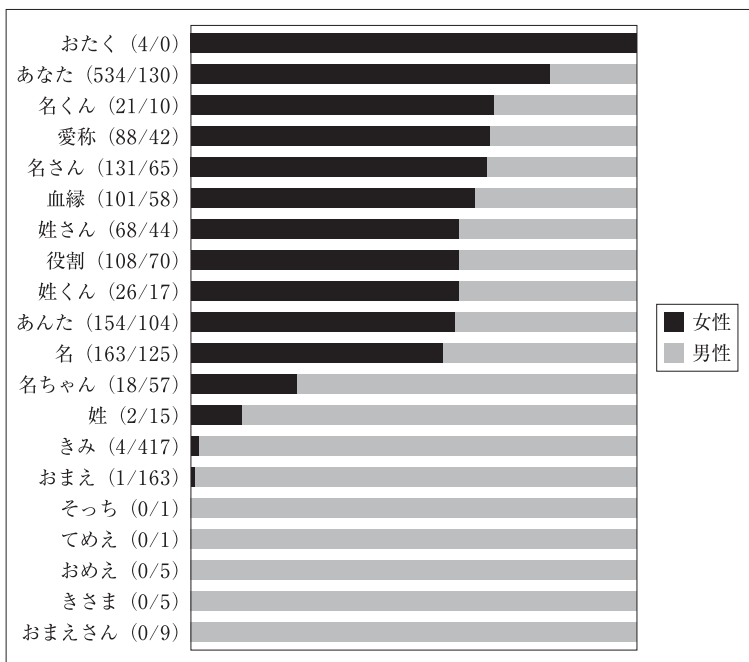


図2 対称詞の男女使用比率（女性1423例／男性1338例）



上記結果より、各人称詞を<女性的><男性的><男女共通>に分類すると、以下のようになる。(分類にあたり、出現回数が10例以上の人称詞に限定し、全年代における各文末詞の男性による使用数を男女合わせた使用数で割り、男性による使用率が20%未満のものを<女性的>、20~79%のものを<男女共通>、80~100%のものを<男性的>とした。なお、使用率については小数点以下を切り捨てて算出した。)

《自称詞》 <女性的> 「(名)」「あたし」「わたし」「私」「わたくし」
<男性的> 「おれ」「ぼく」
<男女共通> 「(血縁)」
《対称詞》 <女性的> 「あなた」
<男性的> 「(姓)」「きみ」「おまえ」
<男女共通> 「(愛称)」「あんた」「(名+)くん・さん・ちゃん」
「(姓+)くん・さん」「(血縁)」「(役割)」

「(血縁)」は「お母さん」「叔父さん」など親類縁者に対して使用するものを指し、「(役割)」は「先生」「小父さん」「奥さん」など社会的地位を示すものなどを指す。

また、出現率の高い人称詞の主な使用状況をまとめると、以下のとおりとなる。

《自称詞》

「私」 最も出現率が高いが、その使用率は女性が92%、男性が8%で、ほぼ女性によって使用されている。女性は、全年齢の女性が使用するが、男性は年配男性による使用が多い。

「ぼく」 2番目に出現率が高いが、女性による使用は1例も見られなかった。若い男性が比較的異性に対して多く使用するが、使用相手をあまり選ばない。

「おれ」 3番目に出現率が高いが、「ぼく」同様、女性による使用は1例も見られなかった。全年齢の男性が使用するが、年配男性は「ぼく」よりも頻繁に使用する。使用相手をあまり選ばないが、家族以外の目上に対してはあまり使用しない傾向がある。

「わたし」 4番目に出現率が高いが、男性による使用は8例しかなく、96%は女性によって使用されている。全年齢の女性が使用し、「あたし」に比べフォーマルで、改まった場所で使用する傾向がある。

「あたし」 5番目に出現率が高いが、男性による使用は1例しかなく、99%は

女性によって使用されている。若い女性が頻繁に使用しており、砕けた話し方をしている人に対して使用する傾向がある。

《対称詞》

「あなた」最も出現率が高いが、その使用率は女性が80%、男性が20%で、ほぼ女性によって使用されている。女性は使用者と使用相手はあまり選ばないが、男性は年配男性が多用する。

「きみ」2番目に出現率が高いが、女性による使用は4例しかなく、99%は男性によって使用されている。年配男性が多用し、目上の人に対して使用する事は滅多に無い。

「あんた」3番目に出現率が高く、その使用率は女性が60%、男性が40%で、人称詞の中ではあまり男女の区別なく使用されている。女性は全年齢の女性が使用するが、男性は若い男性が主に使用する。砕けた話し方をしている人や敬意を必要としない人に対して使用する傾向がある。

「おまえ」4番目に出現率が高いが、女性による使用は1例しかなく、99%は男性によって使用されている。全年齢の男性が使用し、ごく親しく敬意を必要としない人に対して使用する傾向がある。

なお、本稿の調査結果と、小説・戯曲をデータに人称詞について調査した芝(1974)の調査結果を比較すると、以下の共通点及び相違点が挙げられる。

《共通点》: 女性が使用する人称詞は、「私」「わたし」「あたし」「あなた」が大部分を占めている。一方、男性が使用する人称詞は、「ぼく」「おれ」の使用が大部分を占めており、対称詞では「きみ」の使用が最も多い。

《相違点》: 女性が使用する人称詞は、本稿の調査結果の方が芝(1974)の調査結果に比べて「私」が多く、その分「あたし」が少ない。また、本稿の調査ではほとんど見られなかった「おまえ」が、芝(1974)の調査結果では「あんた」と同程度使用されている。一方、男性が使用する人称詞は、本稿の調査結果の方が芝(1974)の調査結果に比べて「おれ」「あんた」が多く、その分「ぼく」が少ない。以上の違いが、調査対象の違いによるものなのか、調査した年代の違いによるものなのか、今後さらに研究を進めていくべきであろう。

また、ことばの男女差について実態調査を行った安田・小川・品川(1999)の調査結果と比較すると、本稿の調査結果では全く見られなかった「うち」、ほとんど見られなかった「(名)(自称詞)」「おたく」の使用が多く見られた。この調査結果の違いは、調査した年代の違いも影響していると思われるが、実際の会話と小説の会話という調査対象の違いによる影響が大きいと思われる。

3.2 文末詞

全年代における各文末詞の使用頻度を男女で比較すると、図3のようになる。

なお、各文末詞を<非常に女性的><女性的><中性的><男性的><非常に男性的>に分類すると、以下ようになる。(分類にあたり、全年代における各文末詞の男性による使用数を男女合わせた使用数で割り、男性による使用率が20%未満のものを<非常に女性的>、20~39%のものを<女性的>、40~59%のものを<中性的>、60~79%のものを<男性的>、80~100%のものを<非常に男性的>とした。なお、使用率については小数点以下を切り捨てて算出した。)

<非常に女性的> かしら・だわ・ますわ・ちょうだい・ですの(?)・ですもの・ですよね・ですわ・てよ・なの・なのね・なのよ・ののね・のよ・のよね・ものね・(名詞+)よ・わ・わね・わよ

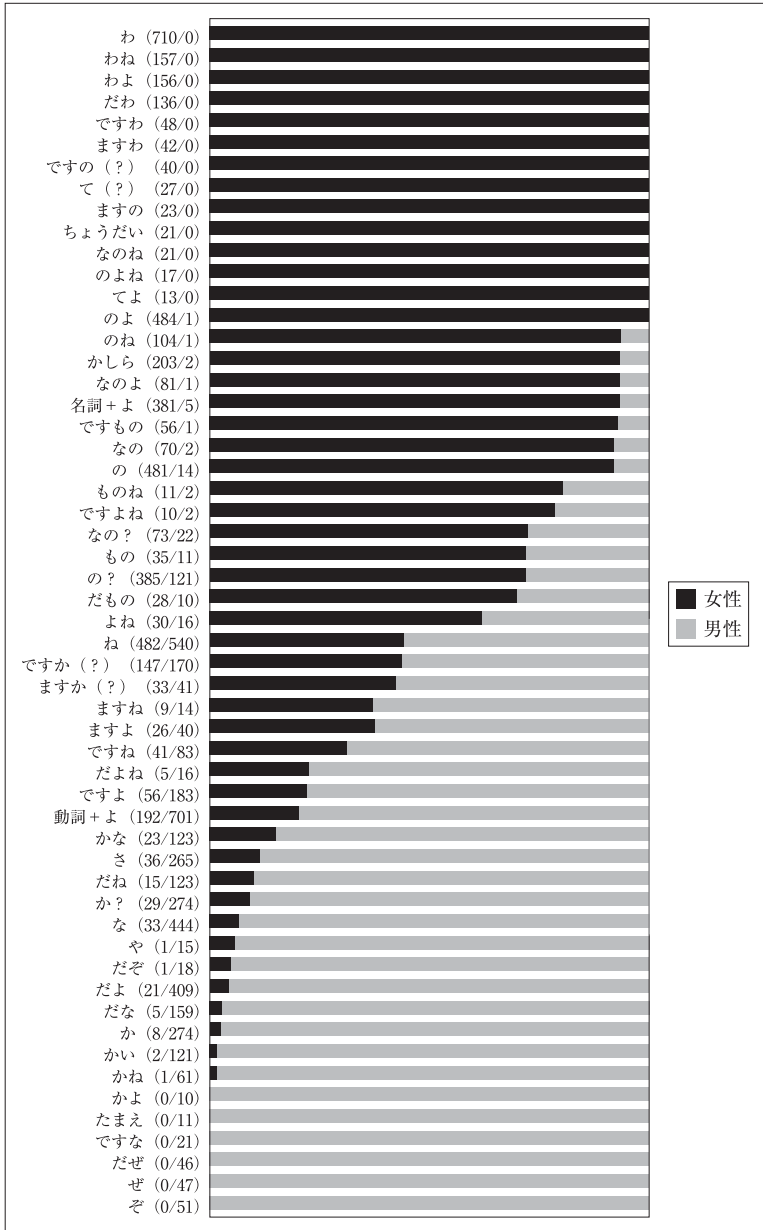
<女性的> だもの・なの?・の?・もの・よね

<中性的> ですか(?)・ね・ますか(?)

<男性的> だよね・ですね・ですよ・ますね・ますよ・(動詞+)よ

<非常に男性的> か・か?・かい・かな・かね・かよ・さ・ぜ・ぞ・だぞ・だぜ・な・だね・たまえ・だよ・ですな・な・や

図3 文末詞の男女使用比率（女性5009例／男性4471例）



《女性が使用する文末詞》

女性が使用する文末詞は<非常に女性的><女性的>なものが大半を占めていたが、若い女性の方が<女性的>な文末詞の割合が多く、年配女性の方が<中性的><男性的>な文末詞を使用する傾向があった。これは、本調査では<中性的>に分類された「ですか(?)」「ますか(?)」と、<男性的>に分類された「ますね」「ますよ」「ですね」「ですよ」といったデス・マス体の文末詞を年配の女性が多用していることが影響していると思われる。若い女性によるデス・マス体の使用率が約5%であるのに対し、年配女性による使用率は約21%に上ったことから、年配女性は<女性的>な文末詞の使用は若い女性に比べて少ないものの、若い女性よりも敬語を多用していることが分かる。

また、女性は年上に対して話すとき、同年や年下に対して話すときよりも<女性的>な文末詞使用の割合が少なく、その分<中性的>な文末詞の割合が多くなった。だが、聞き手の性別によって使用する文末詞に大きな差は見られなかった。

以上より、女性は自分の年齢、聞き手の年齢によって使用する文末詞を使い分けているが、聞き手の性別による使い分けは行っていないことが分かる。

《男性が使用する文末詞》

男性が使用する文末詞も女性と同様、<男性的><非常に男性的>と、自分の性別らしい文末詞が大半を占めていた。若い男性の方が年配男性よりも<女性的>な文末詞の割合が若干多かったが、若い男性と年配男性で使用する文末詞に大きな差は見られず、話し手の年齢による差は女性のときほど見られなかった。だが、男性は年上に対して話すとき、同年や年下に対して話すときよりも<非常に男性的>な文末詞使用の割合が少なく、その分<男性的><中性的>な文末詞の割合が多くなる、という傾向が見られた。また、同性に対して話すときよりも、異性に対して話すときの方が、<女性的>な文末詞使用の割合が多く、やわらかい表現を使用している傾向が見られた。

以上より、男性は聞き手の年齢や性別によって使用する文末詞を使い分けているが、自分の年齢による使い分けは行っていないことが分かる。

なお、本稿の調査結果と、自然談話をデータに文末詞について調査した井出(1979)の調査結果を比較すると、以下の共通点及び相違点が挙げられる。

《共通点》:「わ」「なのね」「かしら」「ぜ」「ぞ」などの使用には、絶対的性差があるという結果が得られた。

《相違点》：本稿の調査では、絶対的性差が見られない文末詞も、どちらか一方の性別による使用の方が多いなどの偏りが見られたのに対し、井出（1979）の調査では、絶対的性差の見られない文末詞は男女両方に同程度使用されている。話しことばであれば聞き手も音声で判断できるが、書きことばには音声が無いため、誰による発言なのかが分かりづらい。こういった書きことばと話しことばによる違いが、本稿と井出（1979）の調査結果の違いにも影響したのである。

3.3 感動詞

全年代における各感動詞の使用頻度を男女で比較すると、図4のようになる。また、感動詞も文末詞と同様に分類すると、以下のとおりとなる。

<非常に女性的> ああ(理解)・あら・あらまあ・いいえ・ううん・ええ・ちょっと・ねえ・まあ

<女性的> あの・そう(理解)・はい

<中性的> いえ・えっ・さあ・そう(同意)・はあ・ほら

<男性的> あれ・うん・ふうん・へえ

<非常に男性的> ああ(同意)・いや・うむ・おい・おや・なあ・ほう

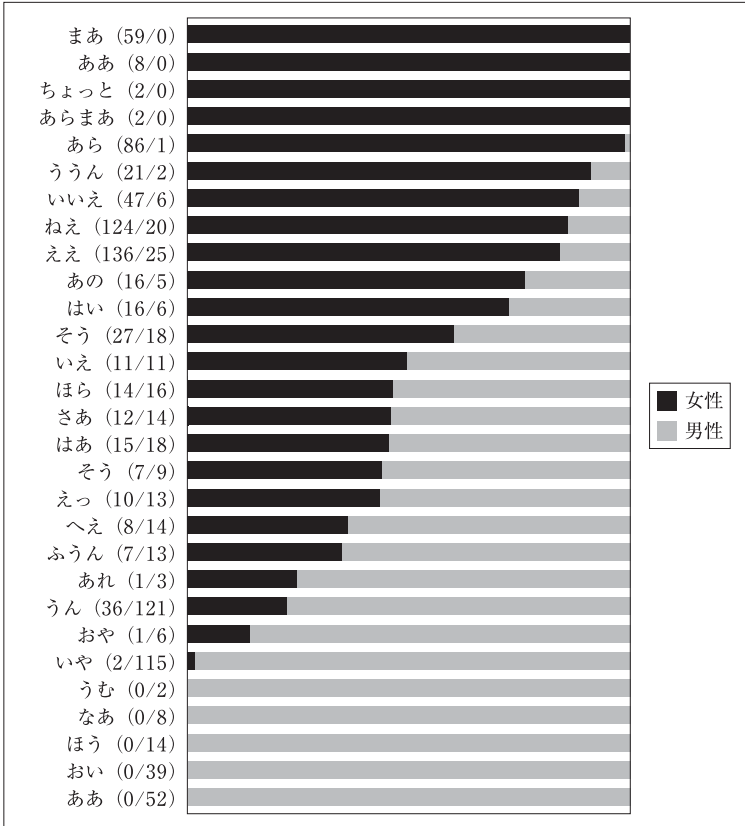
《女性が使用する感動詞》

女性が使用する感動詞は<非常に女性的>な感動詞が大半を占めており、女性の方が男性よりも自分の性別らしい感動詞を使用している。また、年配女性の方が若い女性よりも女性的な感動詞を頻繁に使用しており、年上の人に対して話すときの方が年下や同年齢の人に対して話すときよりも女性的な感動詞を多用する傾向が見られた。だが、聞き手の性別による感動詞の使い分けは見られなかった。

《男性が使用する感動詞》

男性が使用する感動詞は<男性的><非常に男性的>な感動詞が大半を占めており、年配男性の方が若い男性よりも男性的な感動詞を多用する傾向が見られた。また、年下や同年齢の人に対して話すときの方が年上の人に対して話すときよりも男性的な感動詞を多用する傾向、年配の人の方が若い人よりも男性的な感動詞を多用する傾向が見られた。さらに、男性は女性と違い、同性と話すときの方が異性と話すときよりも男性的な感動詞を多用する傾向が見られた。

図4 感動詞の男女使用比率（女性668例／男性551例）



なお、感動詞を男女別に比較した研究は管見では見当たらなかったが、「ほう」に関しては、冨樫(2005)が「「ほう」と結びつきやすい話者のイメージは、男性でかつ年配者であろう」と述べており、本稿の調査結果でも同様の結果が得られている。

3.4 まとめ

自称詞は、＜女性的＞な自称詞の方が＜男性的＞な自称詞よりも種類が多く、反対に、対称詞は、＜女性的＞な対称詞よりも＜男性的＞な対称詞の方が種類が多かった。

文末詞は、＜非常に女性的＞な文末詞の種類が圧倒的に多く、次に＜非常に男

性的>な文末詞の種類が多かった。その中間である<女性的><中性的><男性的>な文末詞は種類が少なく、分類できた54種類のうち14種類しかなかった。その中でも、<中性的><男性的>な文末詞は敬語表現である「です」や「ます」と文末詞の基本体が合わさったデス・マス体が多かった。なお、基本体とデス・マス体の違いについて本稿の調査で得られた結果をまとめると以下ようになる。

「か?」<非常に男性的> 「ですか?」「ますか?」<中性的>
 「の?」<女性的> 「ですの?」「ますの?」<非常に女性的>
 「名詞+よ」<非常に女性的> 「ですよ」<男性的>
 「ね」<中性的> 「ですね」「ますね」<男性的>

感動詞は、<女性的>な感動詞の種類も<男性的>な感動詞の種類も同数あり、項目に数の偏りはなかった。

4. 女ことばと男ことばの変遷

4.1 人称詞

各年代ごとの主な人称詞の使用数および使用率を比較すると、表1、2のようになる。

表1 主な自称詞の使用数および使用率の変遷(出現回数(%))

女性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05	男性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05
私	239 (79)	127 (48)	142 (63)	55 (35)	131 (67)	90 (57)	ぼく	220 (89)	157 (61)	94 (44)	75 (40)	71 (40)	37 (27)
わたし	30 (10)	54 (20)	39 (17)	24 (15)	14 (7)	56 (35)	おれ	14 (6)	85 (33)	74 (35)	114 (60)	100 (56)	93 (67)
あたし	12 (4)	84 (32)	22 (10)	57 (36)	25 (13)	11 (7)	私	7 (3)	15 (6)	36 (17)	0 (0)	4 (2)	3 (2)

女性が使用する自称詞は、「あたし」の使用率が4%から36%へ一旦増加し、近年ではまた7%へと減少している。逆に、「私」と「わたし」合計使用率が89%から50%へ一旦減少し、近年ではまた92%へと増加してきている。3章より、「あたし」は砕けた話し方で、「私」「わたし」の方が「あたし」よりもフォーマル度が高いことから、女性の自称詞は一旦フォーマル度が低く緩やかになったものの、また改まったものになってきていることが分かる。一方、女性が使用する対称詞は、昔は女性に対して「あなた」を、男性に対して「あなた」「(役割)」を主に使

用していたのに対し、現在では「あなた」以外の対称詞は、様々な種類のをほぼ均等に使用するようになっていた。3章より、「あなた」は使用相手を選ばないフォーマル度が高い対称詞であることが分かった。また、「(役割)」は公的な呼称であることから、フォーマル度が高い対称詞であるといえよう。さらに、昔は使用率が0%であったのに現在では全体の10%を占める「(愛称)」は、親しい人に対して親愛の気持ちを表す呼称であるといえよう(1966年から75年にかけて一旦使用率が増加しているように見えるが、出現数43例のうち39例が同一人物によるものなので、そのことを勘案すると、1956年以降劇的な使用率の変化はないといえよう)。以上より、女性が使用する対称詞は現在に近づくにつれて砕けたものになっていっていることが分かる。

表2 主な対称詞の使用数および使用率の変遷(出現回数(%))

女性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05	男性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05
あなた	114 (37)	82 (32)	108 (45)	73 (34)	85 (44)	72 (35)	あなた	49 (20)	33 (11)	17 (7)	9 (5)	7 (3)	15 (9)
あんた	8 (3)	10 (4)	13 (5)	13 (6)	55 (28)	5 (2)	あんた	28 (11)	47 (16)	13 (6)	31 (17)	26 (13)	9 (5)
おまえ	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	おまえ	20 (8)	34 (11)	22 (10)	45 (24)	20 (10)	22 (13)
きみ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	3 (1)	きみ	60 (24)	140 (47)	80 (35)	38 (20)	35 (17)	64 (37)
(愛称)	0 (0)	13 (5)	43 (18)	8 (4)	3 (2)	21 (10)	(愛称)	5 (2)	1 (1)	27 (12)	1 (1)	0 (0)	8 (5)
(役割)	51 (16)	15 (6)	9 (4)	1 (1)	17 (9)	15 (7)	(役割)	25 (10)	3 (1)	12 (5)	0 (0)	26 (13)	4 (2)

それに対し、男性が使用する自称詞は、近年になるにつれて「おれ」の使用率が6%から67%へ増加し、かわりに「ぼく」の使用率が89%から27%へと減少している。3章より、「ぼく」よりも「おれ」の方がフォーマル度が低いことから、男性が使用する自称詞は現在に近づくにつれて砕けたものになっていっていることが分かる。一方、男性が使用する対称詞は、「あなた」の使用率が20%から9%へ減少し、その分「あんた」や「きみ」が使用されるようになってきている。3章より、敬意を必要としない親しい人に対して使用する「あんた」や目上の人には使用しない「きみ」の方が、「あなた」よりもフォーマル度が低いため、男性が使用する対称詞は現在に近づくにつれて砕けたものになっていっていることが分かる。

4.2 文末詞

各年代ごとの文末詞の使用数および使用率を3章で分類した項目ごとに比較すると、表3のようになる。

表3 文末詞の使用数および使用率の変遷(出現回数(%))

女性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05	男性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05
非常に 女性的	632 (67)	613 (75)	820 (73)	439 (55)	503 (67)	293 (49)	非常に 女性的	33 (5)	51 (7)	72 (8)	51 (7)	64 (8)	34 (6)
女性的	90 (10)	78 (10)	66 (6)	104 (13)	94 (13)	119 (20)	女性的	26 (4)	21 (3)	23 (3)	33 (5)	36 (4)	41 (7)
中性的	109 (12)	86 (11)	152 (14)	132 (17)	92 (12)	92 (16)	中性的	160 (23)	146 (19)	155 (18)	90 (12)	119 (15)	81 (14)
男性的	64 (7)	30 (4)	64 (6)	83 (10)	38 (5)	50 (8)	男性的	183 (27)	176 (23)	192 (22)	210 (29)	150 (19)	126 (21)
非常に 男性的	44 (5)	8 (1)	19 (2)	36 (5)	21 (3)	39 (7)	非常に 男性的	288 (42)	387 (50)	427 (49)	344 (47)	435 (54)	317 (53)

女性が使用する文末詞は、＜非常に女性的＞な文末詞の使用率が現代に近づくにつれて67%から49%へ減少し、かわりに＜女性的＞な文末詞の使用率が10%から20%へ増加している。

一方、男性が使用する文末詞は、＜女性的＞＜非常に男性的＞な文末詞の使用率が現在に近づくにつれてそれぞれ4%から7%へ、42%から53%へ増加し、かわりに＜中性的＞な文末詞の使用率が23%から14%へ減少している。また、3章より、本稿の調査結果から分類された＜中性的＞な文末詞はデス・マス体のものが多いことが分かったので、現在の男性の文末詞は硬い表現が減少し、やわらかい表現と粗野な表現に二極化していることが分かる。

各文末詞ごとに見てみると、昔は使用されていた「てよ」「ですわ」「て?」「たまえ」が現代では全く使用されなくなり、現代で使用されている「のよね」「かよ」は昔は全く使用されていなかった。本稿の調査結果では「てよ」「ですわ」「て?」は＜非常に女性的＞な文末詞に、「たまえ」は＜非常に男性的＞な文末詞に分類されている。このことから、現在では絶対的性差のある文末詞を使用しなくなっていることが分かる。現代女性の「てよ」の不使用については遠藤・尾崎(1998)でも指摘されており、本稿の調査でも先行研究と同様の結果が現れたことを確認できた。

4.3 感動詞

各年代ごとの感動詞の使用数および使用率を3章で分類した項目ごとに比較すると、表4のようになる。

表4 感動詞の使用数および使用率の変遷(出現回数(%))

女性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05	男性	46 -55	56 -65	66 -75	76 -85	86 -95	96 -05
非常に 女性的	130 (85)	105 (81)	71 (81)	69 (66)	78 (67)	32 (42)	非常に 女性的	19 (17)	8 (9)	4 (6)	9 (11)	12 (9)	2 (3)
女性的	8 (5)	7 (5)	11 (13)	8 (8)	14 (12)	11 (14)	女性的	12 (11)	2 (2)	1 (1)	7 (8)	4 (3)	3 (4)
中性的	13 (8)	12 (9)	6 (7)	8 (8)	13 (11)	17 (22)	中性的	11 (10)	13 (15)	6 (9)	10 (12)	27 (14)	14 (20)
男性的	1 (1)	6 (5)	0 (0)	19 (18)	12 (10)	14 (18)	男性的	31 (28)	12 (14)	18 (27)	14 (17)	54 (41)	22 (31)
非常に 男性的	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (3)	非常に 男性的	38 (34)	50 (59)	38 (57)	44 (52)	36 (27)	30 (42)

女性が使用する感動詞は、現代に近づくにつれて<非常に女性的>な感動詞の使用率が85%から42%へと減少し、かわりに<中性的><男性的>な感動詞の使用率がそれぞれ8%から22%へ、1%から18%へと増加している。

一方、男性が使用する感動詞は、現代に近づくにつれて<非常に女性的>な感動詞の使用率が17%から3%へ減少し、<中性的><男性的>な感動詞の使用率がそれぞれ10%から20%へ、28%から31%へと増加している。また、<非常に男性的>な感動詞の使用も徐々に減少してきている。

4.4 まとめ

女性は現代に近づくにつれて硬い表現から砕けた表現になり、以前は男性専用とされていた表現への侵食が目立った。男性は現代に近づくにつれて硬い表現と高圧的な表現が減少し、やわらかい表現と粗野な表現に二極化している。人称詞・文末詞・感動詞全てにおいて、男性と女性が使用する表現に幅が広がっている。しかし、<非常に女性的>な表現への男性の侵食、<非常に男性的>な文末詞へ女性の侵食は見られなかった。

また、先行研究でも指摘されてきている、女性による文末詞「わ」の使用の減少、男性による文末詞「か」の使用の減少、女性による「ぞ」「ぜ」の不使用、男性による「わ」の不使用、は本稿の調査でも同様の結果が得られた。このことが

らも、絶対的性差のある文末詞の使用の減少と、男女のお互いの絶対的性差のある文末詞への不可侵が確認できた。

以上より、現代のことばは、絶対的性差の見られる表現と、性差がほとんど見られない表現に二極化している傾向があるといえる。

5．女性作家と男性作家の相違

紙幅の都合で詳しくは書けないが、全体としては以下のような傾向がある。

女性作家の描く女性は、男性作家の描く女性よりも砕けた話し方をしており、<中性的><男性的>な語をより多く使用している。逆に、男性作家の描く女性は、女性作家の描く女性よりも丁寧な話し方や甘えを見せる話し方をしており、<女性的>な語をより多く使用している。女性作家の方が現実の女性の話し方が中性化していることを認識し、それを小説の中の女性のことばにも反映させているが、男性作家は依然として女性には女性らしいことばを使用してほしい、という願望があるようだ。

女性作家の描く男性は、男性作家の描く男性よりも砕けた話し方をしており、<女性的>な語をより多く使用している。男性作家の描く男性は、女性作家の描く男性よりも丁寧な話し方をしている一方、粗野な話し方もしている。これは、3章の調査結果から、男性は女性に対しては丁寧な話し方を、男性に対しては粗野な話し方をしている、という傾向が見られたことから、男性作家の描く男性にはその傾向がより顕著に現れたのだと思われる。男性作家が描く男性の方が、女性作家が描く男性よりも、より現実の男性の話し方に近いことばを使用しているようだ。

ことばの男女差がなくなってきていることを男女ともに容認しているものの、男性のほうが女性には女性らしいことば遣いをしてほしい、という願望があることが伺える。

6．おわりに

本稿では、現代日本の小説の会話文に現れた人称詞・文末詞・感動詞をもとに、女ことばと男ことばの差異と変遷について考察した。

小説は、それが誰による発言なのかを読者に分かりやすくするため、女性には

女性らしいことば遣いを、男性には男性らしいことば遣いをさせる傾向がある。今回の調査では小説60作品、しかもその中の男女各100発話ずつしか調査できなかった。よって、今回の結果をそのまま実際のことば遣いと同等のものとして考え、その時代に書かれた小説の特徴そのものとして受け入れることは出来ない。だが、その当時の人々に求められた男女のことば遣いの傾向を見ることは出来たのではないかと思われる。

女ことば・男ことばを体系づけるには本稿の調査ではデータが少なく、今回の調査で女性的・男性的に分類された語の精度、書きことばと話しことばという違いから現れた結果の相違など、今後の研究課題がいくつも見られる。また、男女差を示す要素には、今回分析した人称詞・文末詞・感動詞以外にも、音変化（促音便・長音化・音便化）・イントネーション・語彙（副詞、接頭辞「お」「ご」等）・敬語（丁寧さ）など、様々なものがある。今後女ことばと男ことばの研究を進めていくにあたり、さらに多くのデータを収集し、上に挙げた要素も分析の観点に加え、考察を深める必要があるであろう。

【参考文献】

- ・ 出版年鑑編集部編（2005）『出版年鑑 2005 年版第 1 巻』 出版ニュース社
- ・ 井出祥子（1979）「大学生の話しことばに見られる男女差異」 文部省科研費特定研究『言語』
ベング班中間報告
- ・ 上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17 pp61 77
- ・ 遠藤織枝・尾崎喜光（1998）「女性のことばの変遷」『日本語学』17 pp56 79
- ・ 金丸芙美（1993）「人称代名詞・呼称」『日本語学』12 6 pp109 119
- ・ 芝元一（1974）「現代語の人称代名詞について」『計量国語学』70 pp29 40
- ・ 富樫純一（2005）「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」『月刊言語』34.11 pp22 29
- ・ 益岡隆志、田窪行則 共著（1992）『基礎日本語文法 改訂版』 くらしお出版
- ・ 松村瑞子（2001）「日本語の会話に見られる男女差」 九州大学大学院紀要『比較社会文化』第
7 巻 pp69 75
- ・ 水本光美（2006）「テレビドラマと実社会における女性文末詞」『日本語とジェンダー』pp73
93 日本語ジェンダー学会
- ・ 安田芳子・小川早百合・品川なぎさ（1999）「現代日本語における男女差の現れと日本語教育
意識・実態調査の分析」『小出記念 日本語教育研究会論文集 7』
- ・ 李徳霞（2003）「若い世代の話し言葉における日本語の性差について 終助詞と人称代名詞を
中心に」 金沢大学大学院社会環境科学研究科『社会環境研究』第 8 号 pp137 145
（くろす りさこ 2007 年日文卒）